

2018 2/27

No.2061

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



長井海の手公園「ソレイユの丘」で、菜の花が見ごろ。同公園入り口近くにある約5千平方メートルの花畑に10万本ほどが植えられ、じゅうたんのように一面に咲き誇っている。



contents

視点・点描	3
子育て支援「見える化」を	
経 済	4
シリーズ “はじめの一步”	
「日銀の金融政策」その①～デフレ脱却	
国 際	6
A I は新統治モデルを作れるか	
中国が野心的な発展戦略	
企業最前線	8
「中食」市場に熱い視線	
弁当や総菜の需要増に対応	
くらし2018	10
急増する高齢者の消費者被害	
広告珍談	12
広告はたのしい⑤⑧	
初めての船旅	
NNAアジア経済レポート	13
神奈川景気データファイル	14
神奈川景気データファイル	15

事務局だより

◇2018年3月定例講演会

2018年3月14日（水）

午後1時30分～3時

横浜情報文化センター6階
「情文ホール」

講師は政治学者、東大名誉教授の姜尚中さん

演題は「『ポスト真実』の時代をどう生きるか」

※本講演会には神奈川新聞読者も招待します。

視点 点描



子育て支援「見える化」を

4月に保育園入園あるいは小学

校入学の子どもを持つ働く親にとって、準備に忙しい時期がやってきた。希望の保育園に入れず、認可保育園の2次募集に応募したり、認可外保育園の空き探しに奔走したりしている人もいることだろう。子どもが小学校入学の場合は、希望する学童保育に入れるかどうか、仕事を続けていく上で

の鍵を握る。

わが家も小学3年の娘がおり、区が運営する学童保育に通っている。4年生になっても引き続き通えるかどうか、原稿を書いている時点ではまだ結果待ち。4月から生活がスムーズに送れるかどうか、2カ月を切っても未定というのは落ち着かない。毎年、区この「ギリギリ」の決定は何とかな

らないものか、と感じている。

この冬はインフルエンザが大流行したが、こんなことがあった。娘の通う学校が、インフルエンザのため学校閉鎖になり、平日の4日間休校となった。幸い娘はイン

フルエンザにならず元気だったが、感染防止のため、学童は預からないルールになっている。学童とは別に、キッズ・シッターにも時々お世話になっているのだが、シッター会社も「感染防止のため、ご遠慮いただきたく」と託児を断られ、仕方なく娘を会社に連れていき、仕事をした。これは職場の理解があつてこそのことだ。

もちろん、感染防止が第一。しかしこうした場合、働く親が安心して働ける選択肢が、どれだけあるというのだろう。筆者の妹も共働きだが、今は高校生になった息子が小学生の時、学級閉鎖になると、致し方なく家で1人で留守番

してもらっていたという。もしその時に大きな地震でもあったら、考えると、やはり子どもは信頼できる大人と一緒にいてほしいと思う。子どもの安全確保も大人の役目だ。

内閣府は8年前の2010年に「子ども・子育てビジョン」を閣議決定した。まず掲げたのは「子どもが主人公（チルドレン・ファースト）」。そして「家族や親が子育てを担う（個人に過剰な負担）」から「社会全体で子育てを支える」（個人の希望の実現）だった。しかし子育て中の身にとって、このビジョンが「前進」した感はない。国との距離にただ、むなしさを感じるばかりだ。ぜひとも国は政策とその成果の「見える化」を図り、国民に伝える努力をしてほしい。

（神奈川新聞社文化部長

秋山 理砂）

初めての船旅

飛鳥IIもいい、ばしふいっく・びーなすも、につぼん丸もすばらしい。どれもクルーズ船!

だけど船旅をたのしむ人は、ごく少ない。海にかこまれたニッポンなのに、なぜか、みんなは船旅がお好きではないようだ。ひところ日本はフネづくりは世界一、つまり造船大国であったのに、どうしてなんだろう。

ボクが最初に、エンジンで動くフネに乗ったのは、琵琶湖の「るり丸」。アルミの張りぼて、ふにやふやした船体。それでもさつそうと?湖面を動いてた。

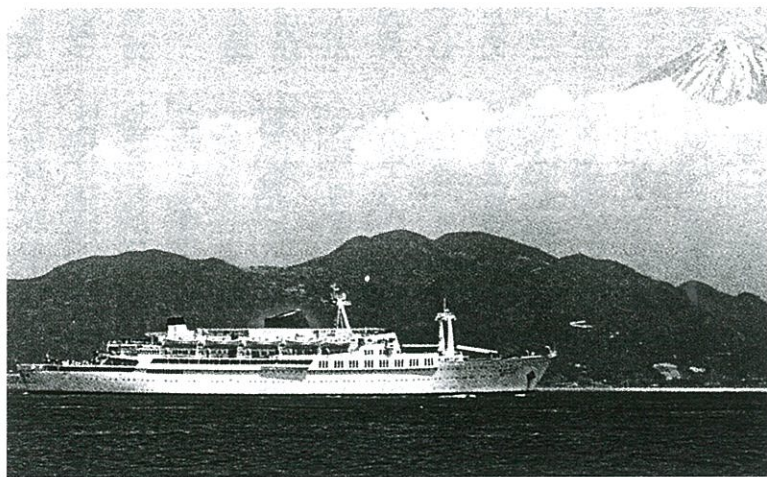
そののち琵琶湖に、「シヨーパー」が走った。アメリカのミシシッピ河を上下する、移動劇場みたいなフネである。船尾に大きな外輪(というのかな)が回っていたが、

ほんとうに推進してたのかどうか知らない。

芦ノ湖には「海賊船」が登場した。つまりキャプテン・キッド

で知られる、あの恐ろしいフネである。ますます、外国から来日する観光客が増えると予測されているのに、琵琶湖や富士山が見える芦ノ湖に、どうしてアメリカやヨーロッパの、それも復元にはほど遠い、ニセモノのフネ。いささか、はずかしい。

ボクが初めてフネに乗って外国に行ったのは、「セブン・シーズ」号という客船。船底になぜか、鉄格子のはまった牢屋があつて、びっくりした。



かつてブラジルで、定期航路に運航していたそうだ。牢屋はそのころの名残りらしい。のちに香港へ移り、セブン・シーズ号になった。1977(昭和52)年、「商船三井客船」が買い取り、「につぼん丸」になった。ボクが乗ったとき、まだ「セブン・シーズ」号

であつた。

赤く塗られた太いエンツツは飾りもの。《船の広告塔》であるほんものは、船尾寄りの両舷にか細く立っていた。9745トン、旅客530人。クルーズ客船の先がけといえる。横浜を出港してグアム島まで、3日ほど(と思う)。

復路がまた楽しかった。グアム島でつかまえた、でっかいヤシガニの背中に、大きく番号を書き入れてレースをさせる。何番がいちばんになるかと、やんやの応援合戦。おもしろかった。

カメラマンの松山勉さん(横浜のスタジオ「ビッグ・ペン」代表)といつしよの船旅。船内くまなく撮影した写真を中心にして、《舟・フネ・船―船旅はたのしいよ》(だったと思う)という展覧会を横浜と、新宿の百貨店で開催した。(美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住)(図)セブン・シーズ号。のちの「につぼん丸」、富士山がみごと